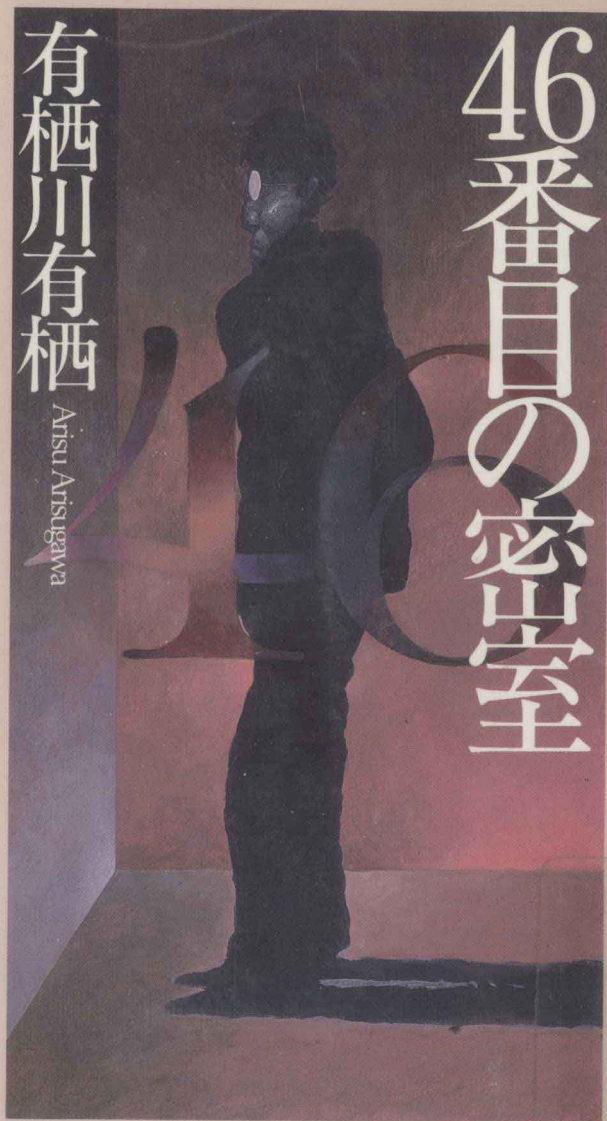


46番目の密室

有栖川有栖

Arisu Arisugawa



46番目の密室

一九九二年三月五日第一刷発行 一九九三年一月五日第四刷発行

KODANSHA NOVELS

定価はカバーに
表示してあります

著者——有栖川有栖 © 1992 ARISU ARISUGAWA Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二 郵便番号 一一一〇一 編集部 〇三・五三九五・三三五六

販売部 〇二・五三九五・三三六二六

製作部 〇二・五三九五・三三六一五

印刷所——株式会社廣済堂 製本所——株式会社堅省堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第三出版部にてお願い致します。
本書の無断複写（コピー）は著作権上での例外を除き、禁じられています。

46番目の密室

有栖川有栖

Artst Art igawa

学院图书馆
书章





84

ISBN4-06-181608-X

C0293 P760E (0)



1910293007602

46番目の密室

有栖川有栖

定価760円(本体738円)

45の密室トリックを発表、日本のディクスン・カー
と呼ばれる真壁聖一が殺された。密室と化した地下の
書庫の暖炉に上半身を押しこまれた上、火をかけられ
るという無惨な姿であった。彼は自ら考え出した46番
目の密室トリックで殺された!? 推理作家、有栖川有
栖と気鋭の“臨床犯罪学者”火村英生の痛快コンビ誕生。

46番目の密室

栖川有栖

ODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス

ブックデザイン 熊谷博人
カバーデザイン 辰巳四郎

目次

フラッシュ・バック	9
第一章 密室の巨匠	13
第二章 焦茶色のサンタクロース	45
第三章 夜の贈り物	73
第四章 不浄 アンホーリー・ナイト の夜	99
第五章 謎を数える	114
第六章 フィールドワーク	146
第七章 犯人捜し、密室捜し	191
第八章 火の答え	227
エピローグ	258
あとがき	264

《登場人物》

火村英生……………臨床犯罪学者

有栖川有栖……………その友人、推理作家

真壁聖一……………推理作家

真壁佐智子……………その妹

真壁真帆……………佐智子の娘

桧垣光司……………同居人

高橋風子……………推理作家

石町慶太……………推理作家

杉井陽二……………編集者

船沢辰彦……………編集者

安永彩子……………編集者

鵜飼……………群馬県警警視

大崎……………北軽井沢署警部

密室を愛し、

密室を憎む、

すべての人々に――

フラッシュ・バック

折からの強い西風に煽られ、炎は瞬く間に五階建の建物全体を包んでいった。夜の闇がその光に払われる。

「消防車はまだか!？」

「通報してもう五分たったぞ」

燃え上がった浅間サンホテルの周りに集まった者の間で怒号が飛びかい、そんな彼らの上に、火の粉がはらはらと降りかかる。野次馬たちの前列では、からくも脱出してきた従業員や宿泊客が恐怖に歪んだ顔を炎に向けていた。

「まだ中に人がいるんだ。逃げ遅れた人がいるんで

すよ。何とかしてやって下さい」

浴衣姿の老人が傍らの若い男の腕にすがって叫ぶ。

「何とかしてくれただって、どうすることもできないよ。中は火の海だろ。逃げ遅れた人の中におじさんの家族でもいるの？」

「そうじゃないんだが、見ておれん」

「そりゃそうだけど……」

炎は轟々と音をたて、風を生みながら広がっていく。何か重いものが崩れ落ちる音が聞こえ、絶望の悲鳴が燃えるホテルの内と外であがった。

「見ろ!」

野次馬の一人が叫ぶ声に、人々は五階の窓を見上げた。ガラス窓の向こうに人影が映っている。男のようだ。男はよろよろと窓に寄ろうとしていたが、ふっとその姿が消えた。煙に巻かれて倒れたように見えた。

死に瀕した人間を目にした人々の胸に苦いものが

込み上げた時、ようやくサイレンが聞こえてきた。人波が割れ、消防車と救急車がその間を突き進む。銀色の消防服に身を包んだ男たちは車が止まりきるのも待たずに飛び降り、ホースを引っ張りながら消火栓へと走った。

「おい、五階に人がいるぞー！」

そんな声に応えるように、梯子車から梯子がするすると五階の窓に伸びた。そして、恐れを知らぬ様子で一人の消防士がそれを駆け登っていく。人々は息を殺してその光景を眺めていた。

酸素マスクをした消防士がバールでガラス窓を叩き割ると、黒い煙が勢いよく噴き出した。彼は怯む様子もなく、窓枠に足を掛けたかと思うと部屋の中に飛び込んだ。と、今一人の消防士が続いて梯子を登りだす。見ているだけの者にとっては手に汗握るショーだった。

十秒ほどして黒煙の中から銀色のヘルメットが覗いたかと思うと、消防士は若い男に肩を貸しながら

現われた。群衆から歓声があがる。その一方、二台の消防車からは放水が始まっていた。激しく炎をあける四階の窓に水の帯が突き刺さる。

五階の窓から助け出された男はぐったりとした様子だったが、梯子の先で待ち構えていた消防士に抱き留められると、自分の足でなんとか梯子段に立った。男を救出した消防士は、同僚に指を一本立てて見せてから、くると振り向いてまた室内に消えた。逃げ遅れた人間がもう一人いる、ということだろう。その勇敢さに声援が飛んだ。

助け出された男は消防士の肩に捕まりながらゆっくりと降りてきた。まだ年は四十過ぎぐらいだろうか。浴衣の前は大きくはだけ、激しく咳き込んでいた。担架を担いだ消防隊員が火の粉を被りながら駆けつける。

「真壁さんが……」

担架に横たえられながら男は呻いた。真壁というのは彼の連れの名前なのだろう。

「大丈夫だ、今救助する」

ヘルメットの隊員は男の耳元に口を寄せ、安心するよう言った。男はそれでも首を捻^{ひね}って、自分がいた部屋を見上げようとする。

その五階の窓に再び酸素マスクの消防士が現われた。今度も浴衣掛けの男を抱き抱えている。前の男と同じ年恰好の客だったが、衰弱の度合いはより大きいようだった。二人の消防士は男に声をかける。と、何事かを聞いた酸素マスクの消防士は、また黒煙の中に飛び込んでいった。まだ残存者がいるということらしい。

「女がいるはずだ、さっき女の悲鳴がした」

野次馬の一人が叫ぶ。群衆の目は五階の窓に釘づけになっていた。

二人目の男を地面まで降ろすと、その消防士も酸素マスクを被りながら梯子を登った。そして同僚の後を追って窓から部屋の中に入っていく。

さらに三台の消防車が到着し、消火活動に加わっ

ていたが、火勢は全く衰えを見せなかった。火は五階に達しようとしている。

また一人の消防士が梯子を駆け上がって黒煙の中に突入する。それとほぼ同時に、四階で大きな音がした。

消防士たちの姿が窓に帰ってくるのを、人々は待った。それは長い数分間だった。

やがて父娘とおぼしき一組の男女が二人の消防士に抱えられて地獄を脱出してきた。どちらも自分の足で歩くことがかなわない状態だった。

「全員救出、全員救出！」

そんな声が隊員の間で飛ぶ。

しかし、群衆も隊員らも、まだ燃える建物の中に一人の消防士が留まっていることを承知していた。男女を地上に降ろした二人の消防士が五階に戻るのとは、その一人を連れ帰るためだとみんな理解した。

浅間山麓^{さんろく}のホテル火災は午前一時五分に鎮火^{ちんか}。

——従業員、宿泊客に重軽傷者九名、死者はなし。
消防士一名が殉死した。三十五歳の、まだ若い消防
士だった。

第一章 密室の巨匠

1

定員二百人ほどの階段教室はおよそ五割の「入り」だった。十二月二十四日という時期、しかも一講目だということを考えればまずまずの人氣ではないか、と思う。私は最上段のドアのすぐ近くに腰を降ろし、壇上の友人を見た。細いネクタイをだらしなく緩めた助教は椅子に浅く掛け、頬杖について講義中だった。

「当然のことながら犯罪学は科学でなくてはならない。酸鼻を極めた事件を収集してそれを皿に盛りつけ、常識という粉末を振り掛けてすむのなら、こん

な楽なことではない。しかし犯罪学がもしそれだけのものだったとしたら、誰がわざわざ学ぶ必要がある？ 利口ぶった人間はプロ野球や映画の評論家をしばしば馬鹿にするが、犯罪学はそれよりさらに低い地位に甘んじなくてはならないだろう」

いつもの彼らしいクールな口調だった。まだ頬杖を突いている。初めての者が聴けば、この若い助教はよほど与えられた仕事に氣に入らないか、よほど不機嫌なのかのどちらかだとも思ふかもしれない。だが、実際はそのどちらでもない。——彼は眠いだ。

「が、だからと言って訳知り顔に科学者ぶるのも危険なことだ。人の心の闇に踏み入ることの困難さを、疑似科学をもって回避した氣になることこそ愚かだ。例えば——君たちは生まれつきの犯罪者というものを信じるか？ あるいは犯罪者の氣質は遺伝すると考えるか？」

学生たちの顔をひと渡り見回す。その途中で私と

目が合ったが、彼はさりげなく私を無視した。

「犯罪者は先天的に犯罪者だ、などという考えは偏見に過ぎないと思う者もいれば、それは時として充分にありうると思う者もいるだろう。私たちはロンプローゾやフートンの生来性犯罪人説を乗り越えてきた。犯罪者の多くの鼻は傾いているのだ、額が狭いだのという欺瞞に満ちた——極めてサンプルが少なく恣意的な——統計を嗤った。しかし、犯罪者は生来のアウトサイダーであり、怪物なのだという考えは多くの人間にとってよほど魅力的であると思えるから、君たちの中に生来性犯罪人説を本心から否定しかねている者もいるだろう。そんな論者は巧みにサンプルを収集してくるものだ。——ジューク一族について知っている者は？」

誰も応えなかった。彼は若白髪の多いぼさぼさの頭をぼりぼりと掻く。

「西村寿行の『血の翳り』を読んだのもないわけか」

助教授は妙なことを言った。推理作家の端くれである私もその作品は未読だった。何か面白い話になりそうな予感がして手帳を開く。

「一八七七年にアメリカの学者リチャード・ダッグデイルがある研究を始めた。犯罪者には犯罪性ともいふべき因子が備わっており、それは遺伝するのではないかという仮説をたててそれを立証しようとしたんだ。彼はジュークという犯罪者をサンプルとして選び出し、その家系を遡行するうちに驚くべき事実面に直面した。百二十五年前の祖先まで遡って調査したところ、ジュークの血族および姻族およびその同居人——トータルで千二百人ほどになるはずだ——のうち、ダッグデイルは血族五百四十人、姻族もしくはその同居人百六十九人をつきとめた。この七百九人はいかなる生活を送っていたのかというと、犯罪者だった者七十七人、ヒモや情婦となつて性的に墮落、逸脱した者二百二人、乞食になつたり養護施設に收容された生活破綻者百四十二人という

結果だった。締めて四百二十一人の問題児がいたということになる。これは彼が発掘した子孫のうちの五十九%、推定される子孫千二百人のうちの三十五%に相当する。尋常な数値ではない。見よ、犯罪は血を伝って受け継がれるのだ、とぶち上げたんだ。ジューク一族は森の人間と呼ばれ、劣悪な生活環境の中で近親婚を繰り返していたという。そのために濃密な悪の血が保持されたというわけだ。また一説には、州政府がこの一族のために費やした金は一八〇〇年代前半だけで百三十万ドルに及ぶという

私は細かい数字——助教授はもちろんメモを見ながら話した——をメモした。講義を聴きにきたわけではなかったのだが。

「同じフィールドワークの結果だとしてもロンブローゾが唱えた説よりはこちらの方が説得力がありそうだな、と思ったか？　ところが落とし穴がある。一八七七年から百二十五年の歳月を遡ったとする

と、ダッグデイルは一七五二年にまで調査の手を伸ばしたことになる。さて、そんな長い手が持てたものかな？　十八世紀のアメリカにおいては官庁や裁判所の文書などまるで整備されていなかったはずだ。彼の調査結果には大いに疑問の余地がある。一九〇七年にエスタブルックという研究者がダッグデイルを受けてその後のジューク一族を調べたところ、犯罪者の発生率は半減していたという。かくしてダッグデイルの『ジューク家の研究』なる報告は失速し、迷信という箱に投げ捨てられた」

私はメモをとる手を止めた。迷信を学んでも仕方がない。

「しかし、今なお、犯罪者の染色体せんしよくたいに常ならざる点はないかと顕微鏡を覗いている研究者がいる。人は犯罪者という怪物——異郷の国の住人に尽きない興味を覚えつつ、自分たち『正常者』とは違う存在なのだという科学的な根拠を欲しているということだな。